

第 3 回海外留学報告

前田 清洲

Ph.D. in Computer Science, Princeton University

2025 年 7 月 15 日

1. 環境

前回の報告書から一年が経ち、大きな変化として 1 年生から 2 年生になりました。それに伴い今年は研究室に新しく博士課程の学生が 4 人入ってきて(つまり博士課程の学生の数に 5 倍に)、さらにポスドクも加わったのでラボ内の雰囲気がガラッと変わりました。これまでアドバイザーとの 1on1 とそこまで変わらなかったラボミーティングもお互いの研究の進捗を共有しあったり、論文の原稿を読んでフィードバックをしあったりとラボミーティングらしさがでてきたように感じます。メンバーと外食する機会も増え、(先輩風を吹かせて)僕がおいしいと思っていた大学近くの店やレストランを紹介したりしていたのですが、そこそこ反応が悪かったのが悲しかったです。一年で舌がアメリカ仕様になったのかもしれませんが。

人数も増えたことでラボメンバーとしての仕事も増えました。僕は物理的な研究室の管理を担当し、ホワイトボードを掃除したりするというのが主な役割でしたが、それに加えて下図のような研究室の装飾(ネオンサインの看板)も作ったりしました。作ったと言っても気づいたときには同じ役回りの相方の方がレーザーカッターで文字のフレームを作ってライト部分のはんだ付けをはじめていたので、僕は全工程の 5%くらいを手伝っただけでしたが…



図 1. 研究室の入り口にあるネオンサイン。この目の前を通る人のほとんどがもの珍しそうに見てくれます。

2. 研究

1 年生の後半くらいから進めていた研究が CogSci 2025 (The 47th Annual Meeting of the Cognitive Science Society) というところに採択されました。この研究では、人が言葉やジェスチャーを使って他者に何か指示を伝えるという作業を繰り返す際に、言葉やジェスチャーがどのように変化していくかを分析し Rational Speech Act (RSA) というフレームワークでモデル化しました。マルチモーダルなコミュニケーションにおいて RSA を適用した試みと言語とジェスチャーの嗜好性・冗長性が人によって異なり、それをモデル化できたというのが面白いところなのではないかと考えています。内容はここから大きく変わらないですが、モデル化の部分を少し発展させたりしてどこかの学会や論文誌に投稿することを目指しています。

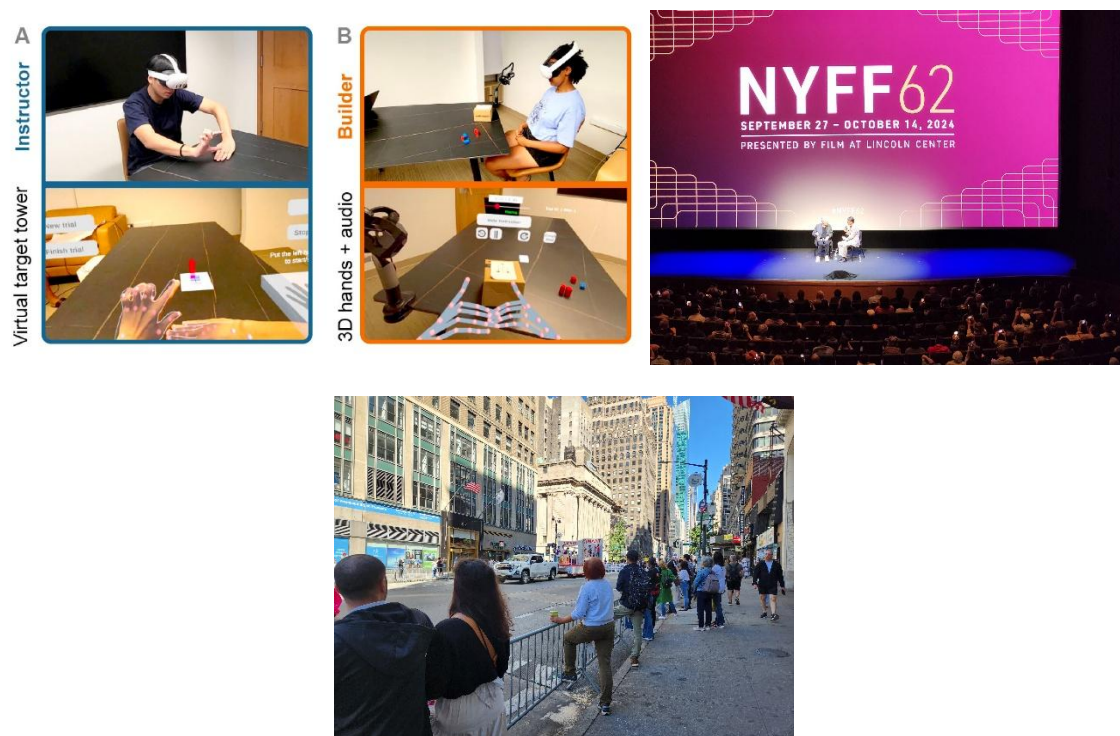


図 2. 論文用の図の一部、ラボメンバーが増えると論文の図の撮影が楽になるというメリットもあります (上左)。ニューヨーク映画祭、デヴィッド・クロネンバーグやレオス・カラックスを拝むことができて良かったです (上右)。ニューヨークで行われていた謎のパレード (下)。